



思いもよらぬ出会い

FERDINANDO FREGA · GILLETTENARRATIVE · GILLETTEVATICANO · 12/17

私はソーシャルメディアに特別な熱意を持ったことが一度もなかった。

61歳になって、私はずっとそれを若い人たちの練習場だと思っていた。少なくとも、それが私の思い込みだった。

だが妻が登録するよう私を押しした。

彼女によれば、それは gillettenarrative.com の可視性を高め、私は何者かを人々に知らせ、私の企てを紹介する助けになるという。少なくともそれが彼女の高潔な意図なのだと、彼女は主張した。

だがソーシャルウェブは、私の頭の枠組みよりはるかに複雑なものだと分かった。

自分を売り込んで自分の投稿のリンクをあちこちに差し込む代わりに、私はただ写真を一枚と自分の個人情報を上げただけだった。自分が何者かを言うのにちょうど足りるだけ、別人のふりはせずに。

それはつねに父が課した規則だった。

生きているあいだ、彼は同じ原則を何度も何度も繰り返した。

まず事実、それから文学的なノワール。

自分のウェブサイトの位置づけに関わる、ほとんど偶然に気づいた前の数日のいくつかの出来事は、自分は一人で観察し読んでいるだけだ、ということ以外を私に信じさせたことはなかった。

他の者たちも見ているとは、遠くからでさえ想像しなかった。

そして彼らが世界のあらゆる隅から来ているかもしれないとは。

妻はいつものように先を見越して、本物であるものと、ただの偽物かもしれないものとはっきり区別するようにと私に念を押しした。

それから彼女は、私を完全に動揺させる質問をした。

「数か月前にあなたが受けた血液検査を確認したの。私が見せてと言いつ張ったから。テストステロンの値が載っていなかったの、クリニックに電話して理由を訊いたわ」

彼女は続ける前に間を置いた。

「向こうが言うには、報告のシステムは三桁までの値しか表示しないんですって。あなたのは四桁だから表示されなかったのよ」

彼女は、何か間違いがあったのか、同じ人物の話をしているのかと尋ねたと私に言った。

彼らは私の個人情報を確認した。

それから妻によれば、女性の受付の一人が微笑みながらこう付け加えた。

「奥様、旦那様に飽きたら、こちらへ送ってくださいね」

注目は、判決というよりむしろ運命であるかのように、つねに、言葉と写真で自分の意図を測る非凡な女たちを通して届いてきた。

最初のメッセージはただ質問をしていた。

私は微笑んで先へ進んだ。

それから、WhatsApp の番号と連絡してほしいという依頼を含む別のメッセージが来た。

最後に、最後のものが来た。

「あなたを知りたい。一晩じゅうあなたのことを考えている。私はアメリカ人で、48歳、独身、そしてあなたが欲しい」

私は微笑んだ。

だが返事をするのを我慢できなかった。

私はこう書いた。

「奥様、あなたの言葉は光栄ですが、私たちを隔てる理由が三つあります。距離と、年齢差と、私の妻です」

「最初の二つの障害はおそらく乗り越えられるでしょう。妻については、喜んで電話番号をお伝えします。取り決めの可能性についてお二人で合意に達せるように」

「私を偶数日と奇数日で分けることもできるかもしれません」

「ただし時間交替制にまで落とさないでください。私は時間割と時計の男ではありません」

「私はあなたが予期しない誰かです。そしていったん人が私に慣れてしまうと、手放すのはなかなか難しくなります」

数時間後、妻が微笑みながら私の書斎に入ってきた。

彼女はアメリカ人の女性からメッセージを受け取ったと知らせ、どうすればいいのか知りたがった。

私の即座の返答は単純だった。

「二人とも幸せになることなら何でも」

それから私はこう付け加えた。

「ただ覚えておいてくれ。私は女が泣くのを見るのが嫌いだ。微笑むのを見るのだけが好きだ」

彼女は振り返り、一言も言わずに部屋を出ていった。

それでも、ソーシャルメディアを実際に会話するために使ったのは、あれが初めてだった。

その晩の夕食で、彼女は私を見つづけていた。

娘は笑っていた。

それから妻が突然爆発した。

「二年前のあなたの写真を見たけど、あなたはもう同じ人間じゃない」

彼女は私をまっすぐ見つめた。

「あなた、本当は一体何者なの」

私はためらわずに答えた。

「私は **Ferdinando Frega**、gillettenarrative.com の創業者にして所有者、**Gillette** におけるイエス・キリストの同僚のひとりだ」

彼女は爆笑した。

それから彼女は、食卓の全員に聞こえる大ききで、自分は決して私を別の女と分け合ったりしないと宣言した。

単純な理由が一つ。

私はすでに、誰の許可もなしに自分を分割することが完璧にできたからだ。

そしてそれで結構だった。

Ferdinando